イナズマイレブンGO　BRAVE

牛先輩

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
イナズマイレブンＧＯ　ＢＲＡＶＥ

【Ｎコード】
Ｎ０７２３ＢＡ

【作者名】
牛先輩

【あらすじ】
松風天馬、剣城京介などが入学する一年前の雷門中。
新入生千歳来春はサッカー部に入部する。後の親友神童拓人、霧野蘭丸と共に。
そして始まるホーリーロード・・・。一年の面々はどういう決断を下すのか！？

あらすじが下手過ぎてちょっとしか書けなくてすいません。
捏造設定ありまくり。

タイトルは決定してないのでいいのが浮かんだら教えてほしいです。
タイトル変更しましたが決定ではありません。タイトルは別に厨二
ではないですよ。

第1話　これが雷門（前書き）

正月になったら突然書きたくなったんだ！
その衝動を抑えられず書いてしまいました！
皆さん温かい目で見守ってください

第1話　これが雷門

『ここが雷門中・・・』

中々でっかい学校だな・・・
僕の名前は千歳来春（ちとせらいは）
今日から雷門中に入学する12歳だ
小学校では・・・アレだったけど・・・ま、色々頑張ろう
まぁその色々に結構重要なのがあるけどさ

この雷門はサッカーでは名門中名門！そして雷門中で有名なのが

サッカー棟という建物だ

確かサッカー部のために作られた部室
中には屋内グラウンドにシャワールームにミーティングルーム・・・
どんだけ・・・

さてじゃあそのサッカー棟とやらに行き――――「お前新入生か？」

『うおっわっ！！！』

なんだ！？なんだ！？一人でだらだらモノローグしてたら！？

「あーあ三国何新入生びびらせてんだよ」
「そうだド！」
「まったくだ」

紫の髪のナルシストっぽい男と横の巨漢な男と鼻に絆創膏つけた男

に言われ角刈りの男は慌てて

「ち、ちょっと待て！南沢、天城、車田！？俺は話しかけただけだぞ！」

「それはともかく助けてやれよ、そいつ腰抜かしてるぞ」

『あ、だ、だ、だ、大丈夫です』

た、立てない・・・

「そうかやはり新入生か」

『はい』

「さっきはすまなかったな驚かせて」

『いえいえ！勝手に驚いただけですし』

「それでも悪かったな、俺は三国太一だよろしくな」

『千歳来春です。よろしくお願いします』

「俺は車田剛一だ」

「天城大地だド」

『そちらの方は・・・？』

「南沢篤志・・・」

『よろしくお願いします』

「全員二年のサッカー部だ」

サッカー部・・・じゃあ・・・

『サッカー部ですか！？僕サッカー部に入りたいです！！』

「そ、そうか・・・」

「「「・・・・・・・・・・・・・・・・・・」」」
先輩方の顔が暗くなる・・・まぁサッカー部だしな
そんな事思ってると三国先輩が案内すると言ってくれた

『・・・・・・・・・・・・・・・・・』
うーん暗い・・・
ここはなんか質問でも

『皆さんのポジションはどこなんですか？』

「ん、ああ俺はＧＫだ」
「俺はＤＦだ」
「以下同文だド」
「・・・フォワ―――『ＦＷですね』なぜ知ってる」
『いやなんとなくですが』

まぁ知ってたけどさ・・・
さーてどうするべきかな？わかりやすくするか、裏でやるか・・・
ま、自分にあってるほうでやるかな

『絶対にこの秘密はばらせないな』

「「「秘密？」」」

『えっ！？なんで僕の心の声が！？』

「いや声に出てたぞ」

「だド」

『あのちなみにどこら辺から』

「絶対にこの秘密はばらせないな――――からだ」

まぁそこまでなら別にいいか・・・

「なぁ秘密ってなんだよ？」

「車田やめろ」

「そろそろ着くド」

「フン・・・」

そしてサッカー部部室改めサッカー棟に到着

第1話　これが雷門（後書き）

くそっ！天城は簡単でも南沢が！
あとキャラの特徴がつかめない！
感想などお待ちしてます！

主人公紹介（前書き）

オリキャラは登場したら紹介していきます

主人公紹介

名前　千歳来春（ちとせらいは）

ポジション　ＦＷ

性別　男？

一人称　僕

特徴　銀髪で艶のある髪。髪の長さは普通。前髪がカールしている。
顔も結構普通だが少し女子っぽい。

性格　明るく活発でクラスや部の中心。知り合いは下の名前で呼んだりあだ名をつけたりする。
しっかりしてるようで抜けてるところがある。やや天然。背が低いのを気にしてる

年齢　１３

身長　１４９センチ

その他の設定　神童と霧野の親友。他人によく好かれてて嫌われる事はない。
サッカーの実力は高く入部してすぐ神童、霧野と共にファーストチームに入る。
部で一番フィフスセクターを恐れているが理由は不明。
そのためフィフスセクターに逆らうものは全力で止める。

必殺技

シュート技　「ザ・ソード」　フィディオのオーディンソードを参考に作った技

ＯＦ＆ＤＦ技　「山崩し」　巨大な山を作りキックで山を崩して崖崩れを起こす

第2話　神童、霧野との出会い（前書き）

書き始めは結構書けるなー

第2話　神童、霧野との出会い

『で、でっかいですね・・・』
「まぁそう思うよな？」
「俺たちも同じリアクションしたからな」
「車田はすっごい叫んでたド」
「う、うるせーな！」
『中はどんな感じなんですか？』

少し楽しみだなこんだけでかいと・・・
早く中を見た――――――――「三国！」なんだ？

「先輩・・・」

先輩？よーするに三年か・・・

「ミーティングの時間だぞ早くしろ」
「はいすいません」
「じゃあ先行くからな」
「はい」

三年の先輩はサッカー棟の中へ戻っていく

「すまないな千歳俺たちもう行かないと」
『いえ！また後で来るので』
「やめとけよ」
『！・・・南沢先輩？』
「・・・行くぞ」
「「「ああ」」」

その時の南沢先輩の顔は三国先輩達もだが何かすっきりしない何かを感じさせた

『・・・まぁ当然か』

その時の僕の声は普段からは想像できないほど深く暗かった

入学式が終わった・・・というか飛ばした・・・だって長いしつまらないし
そして自分のクラスへと向かう・・・

1―C・・・ここか

とりあえず僕は教室のドアを開け中に入るとドアの前にいた男にぶつかりそうになる

『うわっ！とと』
「！！」

その男は普通に横に避け
僕は右半身を倒し右足でバランスをとりながら避ける

ふぅーあぶないあぶない
とりあえず声をかけ「大丈夫か？」ありゃ先に声かけられた

『あ、うん大丈夫そっちは？』
「ああ大丈夫だ」

・・・その男の見た目は灰色でウェーブしてる髪に整った容姿をしていた
ワカメみたいとか思った僕は駄目なんだろうか・・・
「神童！？」
「霧野か・・・」

霧野と呼ばれた女子が窓の方からやってくる
・・・学ラン着てる？趣味男装？でも声低め・・・

「どうしたんだ？」
「いやドアを開けたらぶつかりそうになってな」
「そうか・・・君は？」

『千歳来春（ちとせらいは）おなじクラスみたいだね、よろしく』

「俺、霧野蘭丸」
「俺は、神童拓人」
『拓人くんに蘭丸ちゃ――「言っとくが俺は男だぞ」え！？嘘！？』

確認の視線を拓人に向ける
拓人は慣れた様子で顔を縦に振る

『ええーーーーーーーー！！！？』

嘘！！こんなそこら辺の女子より女子っぽいのに！！！？

「気持ちはわからなくもない」

「ハァ・・・中学でも間違われるとは」

『・・・女の子に間違われるの嫌なの？』

「そりゃそうだろ」

『ま、まぁ気持ちはわかるよ』

前に僕は男なのか女なのか口論になったほど僕も中性的だ

『ま、まぁ蘭丸に悪いし・・・この話はこのくらいにして・・・二人は部活とか入るの？』

「俺はサッカー部に入るつもりだ」

「俺もだ」

クールな拓人の声が少し明るくなる

蘭丸も女の子っぽい顔が普通の男の子みたいな笑顔になる

「千歳は？」

『僕もサッカー部！いやー運がいいな』

「なにがだ？」

『だって中学になってできた初めての友達と部活が同じなんだからさ！』

「ああそうだな！」

「そういう意味じゃ俺達も運がいいな」

『ハハッ』

キーンコーンカーンコーン

「はーい皆適当に席についてくれ」

『拓人！蘭丸！近くの席にしよ！』

「勿論」

「じゃ、早く座ろうぜ席埋まるからな」

そして放課後

第3話　放課後（前書き）

ちょっとサブタイトルに苦戦した

第3話　放課後

「サッカー棟・・・思ってた以上に・・・」
「でかいな」

『僕もビックリしたよ』
「とりあえず中に入ってみるか」

入り口から入り中を覗くとまた広いが・・・

「中に入るとまた圧倒されるな」
『中学生の部室ってレベルじゃないよね』

「あ、あの・・・」

後ろから声が聞こえるので振り向く
そこには三人いて一人は気弱そうな大きい眼鏡
もう一人は浅黒い肌で左目が髪で見えない小柄な男と
最後に同じく褐色肌のゴーグルをおでこに付けた少し軽そうな男の
三人組・・・

「何か用か？」

拓人が一歩その三人組に近付き話しかける
「え、えーと」

「どうした？速水早く聞けって」
「なんだぁ？お前人見知りかぁ？」
「だったら倉間君や浜野君が聞いてくださいよ」
速水と呼ばれた気弱そうな眼鏡はため息をついて再度こちらを向く
「えーと・・・ここがサッカー部の部室なのはわかったんですが入部届けはサッカー部のどこに提出するんですか？」
『わかんない！！』
「「「「「・・・・・・・・・・・・」」」」」
あれ？なんか皆静かになっちゃったよ？僕は事実を言ったまで・・・
「お、俺達もサッカー部に入るし一緒に探そうぜ・・・」
蘭丸が沈黙を破り、三人加わりサッカー棟の中を歩く
歩きながら三人に話しかけてみた
『そういえば三人とも名前は？』
「速水鶴正です」
「倉間典人」
「浜野海士！よろしくー」
「俺は神童拓人」
「霧野蘭丸」
『僕が――「千歳来春だ」ちょっ！拓人！』

「お！なんかあそこっぽくね！」
海士が指差した方向には少し大きめの扉があった
「よーしいこう！」
「浜野君！待ってくださいよ！」
そう言うと海士が扉に進んでいくそれを鶴正が追いかける
『鶴正足速いなぁー』
「ああ、あれは武器になるな」
「とにかく俺達もいこうぜ」

扉を開け中を見てみると
『ここは屋内グラウンドか・・・すごいな観客席まで・・・』
「あっ！皆！人がいるぞ」
『拓人よく気づいたね』
こんな広いグラウンドを見てすぐ人を探すって余裕あるなー
ん？あれは・・・
『三国先輩！』
「！ああ千歳か」
「こいつらは？」
『南沢先輩、全員入部希望者です』
「そうか今年は多いな」

『入部届けはどこに置けば・・・？』
「ん」
南沢先輩が親指で他の部員の人達の方を指差す
「あそこの顧問に渡せ」
よく見ると部員たちのところに先生と思われる人がいた

～第二グラウンド～

「ではこれより入部テストを始める私が監督の久遠道也だ」
「私は顧問の音無春奈」
「ルールは普通の紅白戦だ
点を入れられても点をとれなくても構わない動きを見せてほしい
部員から点をとった場合でも一年からのキックオフとする」
「なお入部希望者は３０人ほどいるため５分ごとに交代していきます」
「以上だ。それでは試合を開始する」

第3話　放課後（後書き）

感想お待ちしてまーす

第４話　入部テスト（前書き）

今回は結構懲りました

第４話　入部テスト

『さてポジションはどうする？』
「俺はＭＦをやらせてもらう」
「俺もー」
「お、俺も」
「俺も――――『もういい！』なぜ？」
『把握しきれないから』

「確かにな、よし！俺に任せてくれ！俺がフォーメーションや指揮をとる！」
「神童・・・」

拓人・・・？なんか便りになるな

『よし！任せた！皆文句ない！？』
「勿論」
「ＯＫ！」
「俺もいいですけど・・・」
『よし！』

「お前達そろそろ始める、準備を済ませろ」
『「「「「はい！」」」」』

フォーメーション

ＦＷ

FW　千歳　倉間
MF　MF　MF
速水　神童　一乃　浜野
DF　DF
向坂　DF　D
F　星野
GK　霧野
蛇山　小阪

「先攻は一年からだはそれでは試合開始！」

その言葉と共にホイッスルの音が鳴り響く

「行くぞ」

『オッケ』

倉間からのキックオフで来春にボールを転がす

それに会わせFW&MFが上がり始める

パスしていき来春から神童に神童から倉間に回る

「よし！このまま！」

「雷門を甘く見ない方がいいぜ」

前から走ってきた南沢にすれ違い様にボールを奪われる

「何っ！」

「甘く見るなと言ったろう？」

走りながら余裕の表情を南沢は見せる

「轟先輩！」

南沢からのパスを受け轟と呼ばれた男はフィールドを翔る

「行くぞ！」

轟はそのまま走るがあえて一乃の方向に向かい走る
あくまでこれはテストなのだ力量を計るためのものだ

「さぁ！止めてみろ！」
「くっ！うおーーー！！」

一乃は大声をあげながら轟に突っ込む
しかし巧みなフェイントで轟はあっさりかわす

「キーパーの実力も見たいし・・・南沢！」

轟と南沢は並行して走る。
当然ディフェンスも止めに来るがあっさりかわす

そして残るはキーパーの虻山と霧野だけだ

「させない！」

そう言い霧野はボールを持つ轟に向かう
しかし轟と南沢はアイコンタクトで合図をとりながらワンツーで抜

き去る

「点を取るぞ！南沢！」

「はい！」

そう確認を取ると轟は南沢にボールを渡す

そして南沢は必殺技の態勢に入る

「ソニックショット！！」

南沢は右足を振り上げ力を溜めボールにその力を正確に込め放つ

「止めろ！虻山！」

「うわあーーー！！」

南沢の必殺技はキーパーの虻山を吹き飛ばしゴールに突き刺さる

ゴールが揺れる音と共にホイッスルが鳴る

「くそっ！」

「あんなの止められないよ」

「レベルが違いすぎる」

「皆・・・」

倉間が悔しがり一乃と霧野が自信を失い神童はそれを見て焦る

そこに来春が声をかける

『そうかな？』

「「「「「！！！！？？？？」」」」」

『・・・監督時間をください』
「わかった１０分だ」
なぜ簡単に時間をくれたのか一年は疑問に思うがすぐさま来春の言葉に頭が行く
「どういうことだ！千歳」
『来春でいいよ、確かに先輩方の動きは速くて軽やかで巧みで鮮やかで強くなにより経験が詰まってる』
「じゃあどうしろってんだよ！？」
「ちゅーかそれじゃあ勝てねーじゃん」
「無理だったんですよ」
倉間が吠え浜野と速水が半ば諦める
『別に試合に勝てとは言われてないんだ。皆が入部できるように実力を見せればいいんだ』
「そんなことわかりきってる！それができないから『できないと決めつけてどうするのさ』！？」
『確かに時には諦めてしまう時もあるさ。「諦めるな」なんて言わない。でも「できる」時に諦めるのは諦めること以上に駄目だと思う』
倉間をはじめとした一年の面々は言葉を失う
「千歳・・・いや来春策はあるのか？」

『なくはない』
「そんなちっぽけな希望で行けるわけが――――――」
『希望は希望だろ？』
「くっ」
『さて試合が再開させよう先輩方が待ってる』
そういいながら来春は自分のポジションに戻る、その時神童とすれ違う様にこう告げる
『この試合の鍵は拓人だ』
「・・・・・・・・・・・・」
チームがまとまらないまま無情にもホイッスルの音が響く
「・・・」
倉間はボールを来春に渡さず後ろの神童に渡す
それにあわせ攻撃陣が上がる
「倉間！なぜ来春にボールを渡さない！？」
「あんなやつに任せられるか！」
『信用ないな』
神童はボールを一乃に渡し一乃は浜野にボールを渡す
浜野はボールをキープし続ける
そこに現雷門のＭＦが止めに入る

「げっ！まずっ！」
「こっちだ！」
神童は無意識に右手を大きく振るう。
その時その場にいた者は神童の振るう手から放たれる光の道を見た
浜野はそれに従うようにボールを蹴る
ボールは神童の導くままに来春に渡る

『ナイス！拓人！海士！』
「おい！なにあいつにボール回してんだ！！」
「いやなんか自然に・・・」

倉間は浜野に吠え続け足が止まる
その時ボールはまだ来春がキープしていた

「行かせないド！」

ここでＤＦの天城が止めに入る・・・が来春はジャンプし空中で回転して弧を描く

「なんだド！？」
『甘いですよ！』

残るはキーパーの三国のみ

『決める！』

来春の右足がボールと共に光輝きボールを蹴れば
光はより一層強く美しく輝きその光は巨大な剣となりゴールに向か

う。
その剣の名も――――――
『ザ・ソード！！！』
「「「三国！」」」
2年にしてゴール守る三国それはつまり3年の先輩をさしおいてということだ。
だからこそ新入生に点を入れられるわけにはいかない。
そんな気持ちを胸に三国は腕に炎を纏い空中で回転し炎を纏った拳でボールを叩きつける
「バーニングキャッチ！！」
・・・がザ・ソードの威力を殺しきれずゴールを許してしまう
これで１－１である
部員達はおろか入部希望者達も絶句した
それもそうだ同じ一年が2年のＤＦを抜き必殺技でゴールを決めたのだから
数秒間沈黙とホイッスルの音だけしかしておらずその数秒後沈黙は喜びの声に変わり
フィールドの一年が戻る来春に駆け寄る、一名除いて
「すごいですよ！」
「ちゅーか！ゴールしちゃったよ！しかも俺アシスト！」
「やるな！来春！」
『拓人こそ！』

「お前必殺技使えたんだな」
『いやいや蘭丸だって練習すればできるよ！』
来春のゴールを称える中フィールドの外の久遠が声をかける
「千歳は交代だ、錦入れ」
「わかったぜよ！」
『はい』
その後の試合は神童の描く光の道が出ることはなかったが
一年も粘り同じ一年の錦龍馬のシュートで２－１になり逆転する。
その後は雷門イレブンも本気になり２－２となり試合はそのまま終わる
一年は何回も試合に出たり下がったりだが来春だけは試合に戻ることはなかった

入部テストが終わり皆帰路に着く
その時来春が神童と霧野と一緒に帰りたいと言い出し3人で帰るところだ
入部テストの結果は後日聞かされるらしい
三人肩を並べて夕日を背に話す
「やったな」
「まぁまだ合格が決まったわけじゃないがな」
『いやいやあの名門の雷門に引き分けだよ！充分だって！』

「それもそうだな」
「それにしても・・・」
『どしたの？蘭丸？』
「来春だけなんで試合に戻らなかったんだ？」
僕は今更疑問に思い原因を頭の中で検索する
『「ザ・ソード」でゴール決めてから・・・だね』
「・・・霧野、来春」
『「何？」』
考え込んでいると拓人が話しかける
すぐ僕と蘭丸は返事をする
「家に寄ってかないか？」
『はい？』
「俺はいいけど・・・よく行くし」
『な、なんで？』
「歩きながらより家の方が話しやすいと思って・・・あと・・・」
「ああ～」
拓人が言葉に詰まると蘭丸が納得した表情になる
『え？なに！？なに！？』
「（振り向くなよ・・・後ろに人がいるんだが）」
「（神童のファンクラブだよ）」
『（ファンクラブ！？）』

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

ああ～そのファンの人たちが話しかけてこないか不安とかそんなんか！仕方ないな

『わかったよ行く』

「助かる！何か飲みたい物はあるか？」

「俺適当にあるものでいいけど」

「来春は？」

『コーラいちごミルク味で！』

「「マニアックだな・・・」」

第5話　神童邸（前書き）

今回か次話ぐらいは神童と霧野のキャラが崩壊気味・・・

第5話　神童邸

え・・・？何これ？
何この巨大な家・・・家というか豪邸じゃん！

「ま、普通驚くよな」
『蘭丸・・・そんな意地悪な笑いされても共感できないよ』
「は、早く入らないか？」
『あ、うん』

後ろからの視線が痛いからね・・・というか・・・

『蘭丸への視線はないの？』
「あるだろうな・・・神童と仲がいいのを妬む視線とかが」
『まぁ容姿が容姿だしね』
「ちなみに小学校ではあだ名が男装じょ「神童！家に入ろう！！」
そうだな」

『仲いいなこの二人・・・』

というか拓人今の嫌がらせ？

『中も広いね・・・』

シャンデリアとかあるし・・・絵画も

「そんなに広いか？」
『自覚してよ拓人・・・』
そんな話をしてると廊下の先から執事っぽい人が笑顔でやってきて
右手を曲げ胸の前に出しながら
「拓人ぼっちゃまお帰りなさいませ」
拓人に挨拶をする
「ああ今日は客が来てるから飲み物を頼む」
拓人が慣れた様子で返事をして飲み物を要求する
執事さんは「はい」と返事をするとすぐさま僕と蘭丸に笑顔を向ける
「何になされますか？」
「俺は何でも」
『僕コーラいちごミルク味でお願いします』
「はいかしこまりました」
・・・・・・・・・・・・・・
『拓人・・・』
「なんだ？」
『あるの？』
「何がだ？」
『コーラいちごミルク味』
「あると・・・思う」
「神童の家はなんでもあるからな」

蘭丸が自慢気に話す、なんでもねぇ・・・

「ここが俺の部屋だ」

『割とすぐ着いたね・・・』

拓人の部屋に入るとやはり部屋も広く見渡すと
トロフィーや賞状の入った本棚や絵画、花、いろいろなものが整理
されていた

男の人の部屋ってこんな感じなんだ・・・

「どうした？入れよ」

『あ、うん』

そう言われ三人で長くて広くてふかふかのソファに座る

「今日の試合すごかったな・・・」

『あの雷門に引き分けだからね』

「そういえば神童がだしたあれは何だったんだ？」

『あの光の道みたいなの？』

「そう」

確かに今思い出しても不思議だな・・・
あれもしかして・・・

『必殺技か必殺タクティクスになるかもね』

「必殺技か・・・」

「来春は何で必殺技が使えるんだ？」

『ちょっと前まですんごく頑張って練習したからね、二人はできな

いの？』
「俺達小学生の頃はプロとかイナズマジャパンの真似ばっかだったからな」
「霧野は真空魔の真似してたよな」
「お前だって――――――――」

こんな会話が一時間以上も続きお手伝いさんも飲み物を出すタイミングがなかったらしい
そして日が完全に沈んだ頃・・・事件は起きた

～神童視点～

『すぅーすぅー』
「来春寝ちゃったか・・・」
「こうやって見ると本当に女みたいだな」
「お前が言えることじゃないけどな？」

確かに来春も霧野みたいに女みたいだけど来春は寝顔も完全に女だな

「とにかく起こすか？」
「いやここまで幸せそうに眠られると起こし辛いな・・・」
「じゃあお前のベッドにでも眠らせるか」
「そうするか・・・」

俺は来春が起きないようにゆっくり背負うとなにか違和感を感じた

「霧野・・・」
「どうした？神童・・・」
「背負ってみろ」
「は！？ちょっと待て！どういうことだ！？」

俺は無理矢理霧野に来春を背負わせると霧野も違和感に気付いたようだ

「この感じ・・・」

「まさか・・・」

「来春って！」

「「女!?」」

俺と霧野の叫び声は屋敷中に広がった

第5話　神童邸（後書き）

大丈夫かな？神童や霧野のキャラ・・・次回はさらにキャラが・・・

第6話　私から僕へ（前書き）

少し深そうなサブタイトルですが・・・まぁ僕のやつですから・・・

というか今回神童と霧野のキャラ崩壊が・・・

まぁめちゃくちゃな思考になったりはしませんが

ただいつものクールな二人が好きな人はちょっと危ないかなと・・・

とりあえず先に謝ります。すいませんでした！

でも結構自信ある話なんですけどよ・・・

第6話　私から僕へ

「「〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜っ！！」」

俺たちは余りの驚きに声が出ない
するとお手伝いさんがやって来る

「どうされました！？ぼっちゃま！？」

「寝て来春で女で男だと思ってたら」
「落ち着いてくださいぼっちゃま！！深呼吸を」

いつも冷静な俺や霧野はどこにいったのか言葉の出し方がわからなくなる
とりあえず深呼吸をする

「「すぅーはぁー」」

「それでどうされました？」

「ら、来春が！」
「お友だちの・・・その方がどうかしましたか？」
「お、女だったんです！！！」
「なんですと！？」

結局お手伝いさんも大混乱して五分ほど過ぎ一旦来春は俺のベッドに寝かす
あれだけ叫んだのに目が覚めなかったのは不幸中の幸いだった

「ど、どうする？霧野！？」
「俺に聞くな！というかお前モテるんだから少しは女に耐性つけろ！」
「無理だ！というかお前に言われたく」

『う～ん』

「「びくっ！？」」

ま、まずい起きる！？

『う～ん（ゴロン）』

「ね、寝相変えただけか・・・」
「（と、とりあえず小声で・・・）」
「（どういうことなんだ！？来春って男じゃないのか！？）」
「（男っぽいけどよく考えたら声も容姿も女っぽい・・・）」
「（・・・なぁ本当に女だよな？）」
「（そうだろ？）」
「（起きたら確認しないか？）」
「（確認って・・・）」
「（本人に・・・）」
「（大丈夫か？）」
「（大丈夫じゃないな）」
「（とりあえず起こすか？偶然を装って）」

・・・？なにか腕を掴まれてるような・・・
恐る恐る自分の腕を掴む物の先を目で追うと・・・

来春の手だった

「～～～～～～～～～～～～～～～！？」

そして霧野にＳＯＳを求めるが・・・

「（すまん・・・俺もだ）」

霧野の腕も見るとこちらと同じように腕を来春に掴まれていた

・・・・・・・・・・・・・・万事休す！！！

『ムニャムニャ』

「「（のんきだな）」」

『拓人～蘭丸～』

「「！！！？」」

どんな夢見てるんだ？

『さすがにそのアイディアはない～』

「（神童・・・）」

「（なんだ？）」

「（俺今結構イラッときたんだが）」

「（奇遇だな俺もだ）」

とりあえず手を外さないと・・・

そう思い来春の腕を掴んで思いっきり外そうとする・・・が
よほど強く掴んでるのか全く外れなかった
ならばと自分の腕を引っ張ってみる
霧野も同様だ

結果来春がベッドから落ちただけだった

「「（・・・・・・・・・・・・・・・）」」

こんな感じですでに小一時間経過
来春はベッドに戻したが・・・

「（神童俺もう門限が・・・）」
「（そんなこと言われても・・・）」

『拓人、蘭丸』

「（また寝言か？）」

霧野は呆れるように言う

『サッカー・・・やめないでよ・・・』
「「！！！？？？？」」

この時来春の発した言葉の意味は図りかねたが・・・来春が涙をこぼしながら言ったことは確かだ
それから来春が起きるのを待つことにした霧野もそうするらしい

～数十分後～

来春視点

目が覚めるとそこは見知らぬ天井だった・・・いやガチで

両手が何かを掴んでる感覚があり見てみる

そこには椅子に座って寝ている拓人と蘭丸の姿があった

・・・え？なんで？というか僕はどこで寝てるの？すごく寝心地がいい

僕はガバッと起き上がり辺りを見渡す

拓人の部屋だ・・・え？じゃあ拓人のベッド？

『えええええぇぇぇーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー！！！』

「「！！！」」

僕の叫び声で拓人も蘭丸も目を覚ます

「ら、来春・・・起きたのか・・・」

『う、う、う、う、うん』

「疲れてたのか？」

『た、拓人！ご、ごめん！ベッド借りちゃって！！』

「いいよ別に・・・ただ・・・」

『ただ・・・？』

拓人と蘭丸が目と目で何かを確認しあうとまた話しかけてきた

「来春って・・・」

「「女だよな？」」

ギクッ！！な！

『なんでそれを！！！？』

「やっぱりそうなのか・・・」

ハッ！しまった！ここで演技しとけば何とかなったのに！

「別に責める理由はないけどなんで男みたくしてるのか教えてくれないか？」

『・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・』

危ない話題は避ければいいか・・・

『ある任務というかやりたいことがあったんだ・・・』

「それは？」

『何個かあるんだけど、ひとつはサッカー部を守るためなんだ』

「サッカー部を・・・」

「守る！？」

二人とも言葉の意味を理解しきれてない

それはそうだろういきなりそんなこと言われたんだから

『それの詳しい事はまだ言えないけど・・・』

「よくわからないがそのためにお前は・・・」

『それだけじゃないよ、もうひとつ・・・皆にサッカーをやって欲しいんだ』

「どういうことだ？」

『・・・知ってる？今の時代サッカーの強さで学校の社会的地位が変わるんだ』

「「！！！？」」

やっぱり二人ともショックだよね・・・

『それで僕の兄が中学生の時有名な私立に入ったんだ、でもそこは廃校になったんだ』

「「！！！？・・なんで？」」

少し伏せて言ったほうが言いか・・・

『よくわからないけど兄は「サッカー」をやっていたから潰れたって言ってた・・・』

「サッカーが・・・」

『でも・・・僕は兄がサッカーをする姿を見るのが好きだった・・・だから僕はサッカーを始めて兄を・・・サッカーでサッカーを奪われた人たちにまたサッカーをやってもらいたいんだ、だから僕は・・・私から僕になったんだ』

「来春・・・」

「お前・・・すごい奴だな・・・」

『・・・話せたのは二人だけだから少しすっきりしたよ』
「・・・なぁ！来春！必殺技の練習しないか！？」
『・・・うんわかった！』

ＰｉＲｉＲｉＲｉＲｉ

空気の読めない着信音に脱力しながらもどこの電話か全員で確認する

「俺の携帯だ」
『蘭丸のか・・・』
「はいもしもし」
《今何時だと思ってんの！？早く帰ってきなさい！！！》
「『・・・・・・・・・・・・・・・』」
「母さんか・・・わかった今から帰るよ」

ピッ

「すまない二人とも！俺もうとっくに門限過ぎてたから帰らないと」

『じゃあ僕も帰らないと・・・』
「あ！二人とも送っていくよ車で」
「でも俺近くだぞ」
『僕もさほど遠くはないけど』
「いいからもう車呼んだし」
「『はやっ・・・』」

走行音のする中僕は拓人と蘭丸に思い切って言ってみる

『拓人！蘭丸！』

「「何？」」

『僕さ・・・二人といる時は・・・・・・私でいいかな？』

「・・・好きにしろ」

「素っ気無く見えるけど神童これでも照れてるからな」

「っ！霧野！！」

『アハハ』

少しの間車の中で笑いは絶えなかったという

第6話　私から僕へ（後書き）

大丈夫でしたか？苦手な方は本当すいません！

第7話　発表と見舞い（前書き）

今年は運が悪い・・・
まさかあんなことになるとは・・・

今回は正直自分で書いたのに苦手っぽい話なんですよね・・・
キャラが恥ずかしい目にあってる感じの・・・
今回は人気投票で頑張ったあいつが出ます。まぁこれはＧＯでの登場の一年前ですが・・・
五条さんじゃないですよ！

第7話　発表と見舞い

～学校　１－Ｃ～

『拓人～』
「どうした？」
『入部テストの結果発表放課後だって！』
「そうか合格するといいが・・・」
『いやー大丈夫だと思うよ？』
「来春は大丈夫だと思うが」
『・・・そうかな？』

こんな会話を続けて部について考え話してると
平凡なチャイムで現実に戻された

～放課後　サッカー棟～

授業？飛ばしたよ？だってめんどいもの

「皆集まったな」

あいかわず威圧感のある人だな久遠監督

「ではこれより合格者を発表する、浜野海士」

「はーい」

「倉間典人」

「はい」

「霧野蘭丸」

「はい！」

以下少し省略するよ！だって長くて呼ばれないから！

「最後に神童拓人、千歳来春」

『「はい！！」』

「以上２４名だ。この雷門サッカー部で頑張ってくれ」

『「「「「はい！！！」」」」』

「練習は明日からだ、音無、後頼むぞ」

音無先生の返事を聞いて久遠監督は行ってしまった

「改めて私は音無春奈顧問をさせてもらってるわ、では一人ずつ挨拶してもらっていいかしら」

「じゃあまず俺が神童拓人です。ＭＦを志望します。よろしくお願いします」

「次は俺が霧野蘭丸です。ＤＦを希望します。以後よろしくお願いします」

『じゃ、お次は僕が、千歳来春です。名字と名前逆とかよく言われますが千歳来春です。あと女子っぽいとか言われますが男です！あと「来春いい加減にしろ」はーいえーとポジションはＦＷです。よろしくお願いします』

印象よくするために明るい笑顔でしめる

そのまま残りの２０人ちょいと先輩が挨拶を済ます

そして下校・・・今日はあそこ行こうかな？

「来春今日は一緒に帰らないのか？」

『ごめん拓人今日行きたいところあるんだ』

「そうか、じゃあまた明日」

『じゃあねー』

今僕は稲妻総合病院にいる。別に怪我も病気もない。ただ見舞いにいくだけ

受付を済ませ階段を上がり病室に着く

そこの病室の名前には「３１５　剣城優一」と書かれていた

『失礼します』

ガラッと病室のドアを開く中には藍色の髪をした兄弟がいた
兄と思われる方はベッドに座り口元のほくろが特徴の優しい表情をしている
弟はモミアゲがしすぎなくらいカールしていて目付きは少し悪い

「来春ちゃん来てくれたんだ」
『お久しぶりです優一さん、京介』
「久しぶり・・・」

弟は挨拶をしてそっぽを向く
まぁ返事（嫌味）を言っとこう

『あれ？京介また目付き悪くなった？』
「そんなことない」

ありゃ余計目線逸らされた

「来春ちゃん本当に久しぶり」
『はい』

兄の名前は「剣城優一」といいこの稲妻総合病院で入院している
弟は「剣城京介」仲のいい兄弟だ
というか・・・

『ちゃん付けやめてくださいよ。私今男ってことになってますから』
「いやでもパッと見女の子のままだよ？」
『ええっ！？嘘！伸ばしてた髪切ったり女物の服捨てたりしたのに・・・』

この兄弟は私が女の子としていた頃からの知り合いだ
落ち込む私をクスクスと優一さんは笑う、京介は一見無表情だが微妙に口角が上がってるのがわかる

「雷門はどう？」
『ええ結構楽しんでますよ』
「友達は？」
『二人できました』
「違和感持たれてない？」
『まぁまぁですね』
「友達どんな子？」
『イケメンお坊っちゃまと女子っぽい男』

相変わらず質問攻めすごいな、もう慣れたけど
そう思いながら予め買っておいたお茶のペットボトルのキャップを開け飲む

「じゃあ彼氏は？」

『ぶっ！！！ちょっ！優一さん！！』
「ごめんごめん今は彼女だったね」
『もぉーーー！！！』

私は恥ずかしさをごまかすように手をブンブン振るう
・・・キャップ開けっぱなしで
当然部屋中に巻き散る
特に隣の京介はびっしょりだった
「・・・・・・・・・・・・・」
あれ！？京介が一歩一歩近づいてくる

拳を強く握り締めて・・・

『タンマ！京介！タンマ！！』

「黙れ・・・」

ひゃぁぁぁーーーー！！！いくら小学生が相手でも痛いものは痛いよ！

そんな時京介を止めたのは

「うっ！ぐぅ！！」

優一さんの呻き声だった

優一さんはうずくまるように足を押さえる

「兄さん！？」

『優一さん！？』

「だ、大丈夫だ・・・うっ！」

『京介！ナースコール！！』

痛み止めを注射し直すらしく邪魔にならないよう病室から出る

そして病室の前で京介に呟く

『優一さんの足あんま良くないんだね』

「ああ」

数年前のこと・・・

私と優一さんと京介でよくサッカーをしていた
私が少し遅れると連絡した矢先事件は起きたらしい

ボールが木に引っ掛かり京介が取ろうとしたところ足場にしていた
枝が折れ
そこを優一さんが身を呈して助けた
しかしその時に優一さんは足に障害を負って歩けなくなってしまった
その後は何度も京介は「自分のせいだと」自分を攻めた

「もういいですよ」

と、看護師さんの声で少し安心し病室に戻ると優一さんは優しい笑顔で

「心配かけてごめん」

と言ってくれた。京介を恨む素振りはまったく見せず
その笑顔を見ると少し涙が零れた

「っ！どうしたの来春ちゃん！？」
『私が・・・あの時いたら優一さんこんなことにならなかったのかな？』
「それは違う！！」
『！！？』

突然京介が大声を出し驚いた・・・

「あれは俺が・・・」
『京介・・・』
「京介それも違う」
「でも！あの時木にボールを引っ掛ける原因も取りに行って落ちたのも俺だ」
「京介！あれは事故だ、お前が気に病む必要はない」
『優一さん、いつか・・・直るんだよね？』

涙を拭きながら私は問う

「わからない・・・でもいつかサッカーで世界に行って見せるよ、二人と一緒に」
『優一さん・・・』
「だからそれまで俺の分も頑張ってほしいんだ」

いつもの優しい顔で優一さんは笑ってくれた

「兄さんそろそろ面会時間終わりだし帰るよ」
『あっ、私も』

病室から出ると京介はまた暗い顔になる。やっぱり気にしちゃうよね

・・・！もしかしたら！

『京介！』
「な、何だよ？」

突然大きな声で呼ばれ京介は驚く

『もしかしたら優一さんの足を直せるかもしれない話があるんだ！』

「！！！？本当か！？」

『飽くまでもしかしたらだけど』

「どうやるんだ！？」

『ある組織から援助してもらうんだ、でもそれにはサッカーで強くないとダメ』

「やる！サッカーで！！」

『ＯＫ！明日からその組織に連絡するよ！』

この会話が後の管理と革命の戦いに関係し千歳来春、剣城京介を苦しめる事はまだ誰も知らない

第7話　発表と見舞い（後書き）

うーん最近いい感じの話をよく書くような・・・

感想来るといいなー

同じイナズマイレブン書いてる人とかイナズマが好きな人とかから

そういえば神童がこれからもう一人の主役的立ち位置になりそうなんだよなー

神童のキャラ紹介も書いてみようかな？

第8話　女の子が暴力なんて・・・（前書き）

この作品は僕にしてはどれも長めだなー
なんだかサブタイトルつけるのがだるくなってきた・・・
なんか自分でも先の展開が分からなく・・・

第8話　女の子が暴力なんて・・・

入部テストの結果を聞かされた翌日
私や拓人、蘭丸、他にも鶴正や海士たちも
皆セカンドチームといういわゆる二軍のチームとして練習している

現在朝練中で
セカンドはまず基礎トレをしている。まぁ基礎は大事だよね

『拓人！ランニング行こう！』
「ああ」
「あっ！俺も行く」
『あ、蘭丸いたんだ』
「お前わざとだろ」

ランニング中に拓人達が話しかけてきた

「来春必殺技ってどうしたらできる？」

私は少し考え込みながら・・・
というか補足として言うと拓人や蘭丸みたいな特定の人物の前とか
モノローグでは僕じゃなく私になるから気を付けてね
え？前までモノローグでも僕だった？気にしちゃ敗けだって！
そして私は頭の中で答えを考えてると至極当たり前の答えが浮かんだ

『まぁ練習あるのみかな』
「やっぱりそうだよな」

『あ、でも！』
「「？」」
『自分の特徴やあってるものを理解するのが近道かな』
「理解か・・・」
「神童は音楽だな」
「霧野は・・・霧？」
「真面目に言ってるのか？」
『あと名前とか決めてモチベーションを上げたり』

まぁザ・ソードはＦＦＩに出てた選手のパクリみたいなものだけど

「名前・・・」
「神童はミュージックなんとかとかか？」
「そのままだな」
「じゃあ俺は？」
「霧だからな」
「その話引っ張るのかよ」
『ザ・ミストとか？』
「なるほど・・・」

ランニングを終えその他の基礎トレを始めそのまま朝練が終了する

『はぁ拓人まさか学級委員になるとはなー』
責任感強い役になったなぁー
これじゃあ拓人忙しいから話せないや・・・

蘭丸も手伝いしてて暇だし・・・ん？
私は窓の外から喧嘩をしてると思われる人影を見た
どうする行くか行かないか・・・
よし見に行こう！

到着！えーと・・・あっいた！
制服のリボンを着けず腕捲りした制服に長いスカートで頭にリボンを付けた女子と
ＴＨＥ不良な人が喧嘩してる・・・というか一方的に女子が攻撃してるんだけど

「おら！男ならかかってこいや」
「うぐぅ」
「来ねーならこっちから『はいストーップ』！？」

女子の腕を掴んで止める
いやー興味本位で来たけどさすがに目の前で人殴られたら気分悪いし

「なんだよ！？お前！」
『１－Ｃの千歳来春だよ！』
「はぁ・・・満面の笑みで言われても」
『まぁとにかくそこの不良１号逃げて逃げて』
「・・・・・・・・」

シッシッと私は手を振る
不良１号は走って逃げてった

プライドなしか・・・

「お前！何で邪魔すんだよ！」

『まぁまぁとりあえずじ・こ・し・ょ・う・か・い・しようか♪』

微妙に脅すような笑顔で言ってみた

「・・・瀬戸水鳥」

『水鳥ちゃんね、なんで喧嘩してたの？』

「あいつアタシが女だからってバカにしたんだよ！」

『それにムカついて殴ったと、うーん・・・あの不良が一番悪いかな』

「だろ！」

『でも君は二番目に悪いよね』

「っ！何でだよ！？」

『女の子が暴力なんてすごくかっこ悪くて可愛くないじゃん！』

「・・・・・・・・・・・・・・」

あ、言葉失ってる

『女の子が暴力を振ってはいけない十分な理由でしょ』

「お前・・・面白いやつだな」

落ち着いてくれた、まったく

「あいつ行っちまったしもう用ねーからアタシもう戻んな」

『バイバーイ』

水鳥ちゃんが私に背を向け歩きだす、数歩進んだところで水鳥ちゃ

んが振り向く

「なぁ聞きてーことがあんだけど」

『何？』

「お前なんで男の格好してんの？」

『ああ！これ？これは・・・ってなんでわかったの！？』

「雰囲気とかで丸分かりだって」

『そんな・・・』

というか雰囲気って・・・

「まぁ安心しろ誰にも言わねーから」

『大丈夫だよね？』

「大丈夫だってこの水鳥さんに任せろって」

『何を任せるの？』

「じゃあなー」

あ、逃げた！・・・まぁいいや授業始まるし

私が教室に戻ると拓人が・・・

「遅かったな来春」

『いやーちょっと好奇心で・・・』

「？・・・次の授業は音楽だからな、早く準備して行くぞ」

『はーい』

拓人待っててくれたのかな？まさか！

「俺忘れられてないか？」
「霧野」
『蘭丸いたの？』
「同じことをするな」
軽いチョップを頭にくらった
まぁ痛くはないかな
『さて準備準備！』

そして放課後、例によって授業はスキップした
基礎練習を続けボールを使った練習に移る
「行くぞ！霧野！」
「来い！」
拓人と蘭丸がボールを奪い合う
拓人が奪えば蘭丸も奪う
私は一人でシュート練習をしている・・・と
ＰｉＲｉＲｉＲｉＲｉＲｉ
電話が鳴る

「あれ？誰の電話ですか？」
『あ、ごめん鶴正！僕の！』
「練習中だぞ！」
『ごめん拓人ちょっと離れるよ』
そそくさと私はグラウンドを離れる
「浜野くん」
「何？速水」
「千歳くん男だと思いますか？」
「そーじゃねーの？」
「何か違和感があるんですよね・・・」

ここらへんでいいかな？
えーと誰だろう・・・
ああこの人か・・・とりあえず出よっと
『はい、もしもし』
《――――――――――がお呼びです》
『わかりました』
ある組織の本部の中のある一室の扉が開く

その部屋にはイスに座った男とその側近がいる
コツコツと私は足音をたてそのイスに座る男が見下ろせる位置まで歩く

「久しぶりだな千歳来春」
『お久しぶりです。何か御用でしょうか？聖帝イシドシュウジ様』

第8話　女の子が暴力なんて・・・（後書き）

やっぱ中心になるキャラはキャラ紹介を書くべきか・・・

第9話　フィフスセクター（前書き）

今回ちょっと暗め・・・・
書いてて心苦しい・・・・

第9話　フィフスセクター

歳は若めで肩ぐらいまでの青の混じった白髪に左耳につけたピアスが特徴の男に見下ろされる位置で話す
「雷門について聞きたい」
『フィフスセクターに逆らう者はでていません、一年はまだ知らされていませんが』
「なるほど」
『彼はどうですか？』
「剣城京介か・・・中々の人材だ」
『そうですか』
「もういい下がれ」
『はい、例の条件お願いします』
「わかっている、シードとしての働き期待している」
『はい！』

そう私はシードだ・・・
説明したいところだけど・・・練習があるし・・・
とかなんとか思ってるともう雷門に戻ってこれたよ・・・
ん？なんかもめてる？
「どういうことですか監督！？フィフスセクターって！？」
「勝敗指示とかシードとかって一体何なんですか！？」
「落ち着け！神童、霧野」

なんだろう？拓人と蘭丸が久遠監督に声を荒げて何かを問い質して
三国先輩がなだめてる・・・？
聞いてみないと分からないな・・・

『海士ー今どういう状況？』
「ん？あ、千歳、んーとフィフスセクターとか勝敗指示がどーとか」
『！！！』

なんで？なんでフィフスセクターの話に・・・？

『なんでそんな話に！？』
「え・・・？えーと・・・」

私が突然聞いたせいか海士はたじろぐ

「練習試合が決まったんですよ・・・」
『鶴正・・・練習試合？』

なるほどそういうことか・・・でも・・・

早過ぎるない？・・・

「一体なんなんですか！？フィフスセクターって！」
「・・・・・・・・・・・・」

監督は黙ったままだ・・・まぁそうだろうけど
とりあえず止めないと・・・

『拓人・・おちつ「サッカー管理組織だ」！？』

南沢先輩・・・？

「南沢さん！？どういうことですか！？サッカー管理組織って」

「管理されてるのさ中学サッカーは・・・」

管理・・・支配の間違いだと思うけど

というか三国先輩たちは止めないんだね・・・

「１０年前イナズマジャパンが世界制覇したことで「サッカー」の人気は高まり「サッカー」は人や学校の「優劣」を決める物になった」

「はいその話は知っています」

『サッカーをやる人が増えたからそうなったんですよね？』

「ああ」

私がなぜそんなこと知っているのか、皆疑問の表情を浮かべたが、話に頭が行くものがほとんどだった

「どういうことだ？千歳」

すぐさま問いかけてきたのは典人だった

私に聞いたから私が返すのが普通だと、すぐさま返答をした

『サッカーをやる者が増える、つまり、サッカーをやるのが当たり前、これの意味がわかる？』

「・・・サッカーが正しいと？」

『まぁ間違ってもない、でも例えて言えば、勉強かな』

「勉強？」

これには先輩方も疑問の表情だ、まぁ深く考えないようにしてたってことかな

『だって勉強は皆当たり前のようにやってる、勉強ができる人は、良い高校、大学、会社へと進める、つまり勉強ができる人は偉いって言っても過言じゃない
そして今サッカーはそれに近いと言って良いかもしれない』

「やるのが当たり前だから人の優劣が決まるってことか？」
『そう、そこはさっきの「サッカーが正しい」だね』

皆、特に一年の皆は唖然としている
とりあえず後は南沢先輩にバトンタッチかな

「そんな中設立されたのがサッカー管理組織フィフスセクターだ」
「それが何なのか教えてください」

聞いて大丈夫かな？聞いたら・・・

「今の時代サッカーでの勝利はどれだけの価値があると思う？」
「人の優劣が決まるほどの価値・・・」
「そう、その勝利をどの学校にも勝敗指示で公平に与えるのがフィフスセクターだ」

勝利が少ない学校はランクが低いと見なされ人が去り、入る者も減り廃校になる可能性もある
だからその価値ある勝利を・・・

「つまりサッカーの勝利を管理してるってことですか？」
「ああ、そういうことだ」

「それに強大な権力を持っている、逆らう学校の部は廃部、場合によっては廃校にされる・・・」

三国先輩が口を開いたと思えば、皆三国先輩の言ったことに息を呑む

「そしてシードっていうのは・・・」

皆すっかりフィフスや現在のサッカー界の話に頭が行ってたのかハッとなる

そしてすぐさま暗い表情で三国先輩と南沢先輩が話す

「シードはフィフスセクターの教育を受け全国の各中学に送り込まれるスパイだ」

「そのシードが逆らおうとする者を止める・・・」

「シードについて詳しい事は俺達もわからないが、シードはフィフスセクターによるサッカーの訓練を受けてるらしい、そのシードに部が潰されたところもあるらしい・・・」

「雷門にシードがいるかいないのかはわからない、いたとしても誰なのか知る術はない」

私がそのシードだけど・・・

三国先輩と南沢先輩が説明するごとにみんなの表情は変わっていった

険しくなる者、恐怖する者、落ち込む者など様々だった

しばし沈黙が続く・・・

そんな中久遠監督は口を開く

「・・・勝敗指示は明日伝える、それまでに頭を冷やせ」

そう言い久遠監督は去っていった

冷静で威圧感のある久遠監督も今は何か雰囲気が違う気がした

「ら、来春・・・」

『何？拓人』

振り向くと顔色蒼白な拓人と蘭丸がいる

明らかにショックを受けてる・・・

まぁとりあえず話を聞かないと

「俺達もう帰ることにしたから一緒に帰らないか？」

『帰る！？』

「ああ、練習に集中できそうにない・・・」

『そっか・・・じゃあ帰ろっか』

最悪な気分で帰路につくことになった・・・

第9話　フィフスセクター（後書き）

あまり納得できない感じだなー
その内書き直そうかな？
そういえば学校の価値がどうのこうのは小学校ではなかったのかな？
まぁこれではあまりなかったってことで！

第１０話　パーティー（前書き）

パーティーと言ったら金持ちの集まり・・・・みたいなイメージがある・・・

まったくその通りだ・・・今回の話・・・

第１０話　パーティー

気分最悪のまま帰宅した・・・
私はドアを開け無理して男っぽくした自分の部屋の窓の近くのベッドに寝転ぶ

『はぁ・・・』

そりゃショックだろうけどさ・・・
でも受け入れないとサッカーはできない・・・
小学校まではまだサッカーでの価値はあまり決まってなかったからまだいいけどさ

こんなこと考えてるとドアをノックする音がする、それに続くように聞き慣れた声が聞こえる

「来春ー、ちょっといいか？」
『何？お父さん？』

声の主は父だ

『めずらしいなお父さんが家にいるなんて』

と、私は呟く、父は仕事が忙しくていつも家にいない、帰ったとしてもあまり話さず寝てる

とりあえずドアを開けお父さんを部屋に入れる

「来春お願いがあるんだよ」

『お願い？』

普段お父さんからお願いなんてされないからなー、と思いながらお父さんを座らせ自分は机のイスに座る

「ああ、パーティーに出て欲しいんだ」

『パーティー？』

「父さんの仕事関係の人がパーティーを開くらしいから来て欲しいんだ」

『なんでまた・・・』

私が嫌そうな顔をすると、父さんは両手を合わせて頭を下げ

「お願いだ！」

と、言う

・・・はぁ・・・まぁ気分変えたいし・・・

『いいよ』

「本当か！？」

「うん」とさらに返すとお父さんは「よしっ！」とガッツポーズをする

『で？いつ行くの？』

「今からだ！」

『は！？』

早い早い早い！！！まだ４時半だよ！？

「よし！そうと決まったら！行くぞ！」
『え！？ちょっと待って！まだ準備が！！』
「あっちに色々あるから大丈夫だ！」

そのまま腕を引っ張られ外のガレージの前まで連れてこられる
まったく・・・お父さんは本当によく分からない・・・
・・・そういえば・・・

『兄さんは連れていかないの・・・？』
「！・・・来秋は・・・」
『ま、無理かな・・・』
「・・・・・・・・そうだな・・・・」

今話に出た兄は前に拓人達と話したときに出たっけ
なんでサッカーで・・・

『わぁーでっかいホテルだねぇ』

到着すると呆気にとられたって感じだ・・・
周りには高そうなリムジンやらがたくさん止まってる・・・
なんかこんなところにただの中学生がいるって場違いな気が・・・

中に入るとまたすごいね・・・シャンデリアは当たり前で絵画とかもたくさんある・・・
なんで私ここにいるんだろう・・・しかもよく考えたらまだ制服のままだ・・・
今からでも帰るべきかな？

「来春」
『何？お父さん』
「お召し物の用意ができたそうだ、あっちで着せてもらえるから、行ってきなさい」
『はぁ・・・中学生なんだから着るなら自分で着たい・・・』

・・・しまった・・・ドレスを着せさせられてしまった・・・
今私男って事になってるのに大丈夫かな？
それはそれとしてこのドレス綺麗だなー、でも高そう・・・

「どうした？来春？」
『なんでもない・・・』

テンション低めでパーティー会場の部屋まで歩く・・・
すると大きな扉が見え開く・・・

あーやっぱり広いなー・・・
サッカーフィールド何個分だろう？
始まるまで適当にウロウロしてようかな？

とかなんとか思ってたらまたお父さんが話しかけてきた

「来春ー父さんの仕事関係の人のご家族が来てるらしくて紹介してもらえるから来てくれー」

『はーい』

はぁ・・・自由じゃないわけか・・・というかかなり説明口調・・・

そのご家族とやらの前に連れてこられ目が合うとお互い衝撃が走った

「この方が神童財閥の御曹司の神童拓人お坊ちゃまだ、こちら娘の来春です！」

『「・・・・・・・・・・・・・・・・！！！？」』

『た、た、た！』

「ら、ら、ら！」

『拓人！！！？』

「来春！！！？」

なんでこんなところで・・・？

そんな疑問を考える余裕もなかった・・・

第１０話　パーティー（後書き）

さて！バ〇殿が始まるから早くしないと！

さて・・・この話の続き・・・霧野は出そうか出さないか・・・

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0723ba/

イナズマイレブンＧＯ　ＢＲＡＶＥ

2012年1月10日19時45分発行